

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月10日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520544

研究課題名（和文）大学留学生の話し合い能力育成に向けたカリキュラム開発

研究課題名（英文）Development at workshop-based education program for fostering foreign student's self-directive discussion abilities

研究代表者

森本 郁代 (MORIMOTO IKUYO)

関西学院大学・法学部・教授

研究者番号：40434881

研究成果の概要（和文）：国内の大学や大学院などで学ぶ外国人留学生の数は、「留学生 30 万人計画」のもと、今後更に増えることが予想される。国際社会のグローバル化と日本社会の多文化化とが同時に進む昨今、留学生が卒業後日本で就職して日本社会に定着することが期待されるようになっている。以上の背景を踏まえ、本研究では、国内の多文化共生とグローバル化に寄与することを目標に大学留学生が日本語による話し合い能力を体系的に身につけることができるカリキュラムを開発した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a new educational program for foreign students of Japanese universities that is designed to foster their discussion abilities in Japanese. Recently, the number of foreign students in Japan has been increasing. They are expected to become members of Japanese society and contribute to the globalization and the realization of multi-culturalism in Japan. To achieve this, not only Japanese but also foreign people are required to acquire discussion skills to enable them to cooperate with each other to reach a consensus as well solve problems. With this background, we developed the workshop-based learning program for foreign undergraduates in which they acquire self-supporting discussion abilities in Japanese.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語教育

キーワード：教授法、カリキュラム、話し合い能力

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本国内の大学等で学ぶ外国人留学生の数は、「留学生 30 万人計画」のもと、今後更に増えることが予想される。国際社会のグローバル化と日本社会の多文化化とが同時に

進む昨今、留学生が卒業後日本で就職して日本社会に定着することが期待されるようになっている。

(2) 大学教育の現場では、コミュニケーション

ン・スキル、論理的思考力、問題解決力、そして他者と協調・協働して行動できる力が重視されているが、こうした能力が総動員される社会的な場が「話し合い」であり、教育の場で「話し合い能力」を育成することが求められている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語が中上級レベルの大学留学生の日本語による話し合い能力育成のカリキュラムを開発することである。カリキュラムの開発にあたって、以下の点を明らかにする。

- (1) 大学留学生の話し合い能力の現状を調査する。
- (2) 大学留学生の話し合いの進め方の特徴を明らかにする。
- (3) 上記 2 点について、日本人大学生の話し合い能力の現状と、話し合いの進め方とを比較する。
- (4) 以上 3 点を踏まえて暫定版のカリキュラムを策定し、実践を行った上で、再検討と改善を行う。

## 3. 研究の方法

本研究では、研究代表者らが策定した話し合いの評価指標と、日本人大学生の話し合い能力育成のための学習カリキュラムの成果を踏まえ、以下の方法で研究を行なった。

- (1) 実際の話し合い場面の収録と分析に基づいて日本語が中上級レベルの大学留学生の話し合い能力の現状を調査し、日本人大学生の話し合い能力との比較を行って留学生用の話し合いの評価指標を策定する。
- (2) 1 の比較を踏まえ、研究代表者らが開発した日本人大学生向けのカリキュラムのうち、留学生向けのカリキュラムに応用できる点、変更すべき点等を検討し、暫定的なカリキュラムを作成する。
- (3) カリキュラムを実践し、大学生留学生の話し合い能力がどのように変化したかを分析する。
- (4) 話し合い能力の検証結果を踏まえて、カリキュラムの改善を行う。

## 4. 研究成果

(1) 大学留学生の話し合いに対する、同じ留学生による評価の観点

大学留学生 3~4 人による 6 回分の話し合いをビデオで収録し、留学生（中国・韓国・フィリピン・ミャンマー）41 人に、7 段階の尺度で、印象評定をしてもらった。なお、評

定に用いた評定語対は以下の表 1 のとおりである。

表 1：評定語対

なめらかな--たどたどしい、まとまった--ばらばらな、均質な--多様な、つながりのある--とぎれがち、かたくるしい--なごやかな、直線的な--曲がりくねった、表面的な--深まりのある、進展した--停滞した、粗い--細かい、中立な--偏った、練り上げられた--安易な、矛盾した--一貫した、真剣な--適当な、多面的な--一面的な、妥協した--固執した、消極的な--積極的な、スムーズな--ぎこちない、にぎやかな--おとなしい、人ごとのような--参加している、共感した--対立した、協調的な--勝手な、オープンでない--オープンな、心からの--わざとらしい、動きのある--動きのない、急いだ--ゆったりとした、対等な--対等でない、正確な--不正確な、不適切な--適切な、明確な--あいまいな、わかりにくい--わかりやすい、豊富な--乏しい

この評定結果に対して、7 件法の尺度評定を間隔尺度以上とみなして、SPSS で因子分析（いずれも最尤法、プロマックス回転）を行った。スクリー法により因子数を決定したところ、5 因子が抽出された。各因子は、「1. 議論の流れ」「2. 参加者の関係性」「3. 議論の活発さ」「4. 議論の緻密さ」「5. 適切な言動」と解釈された（表 2）。信頼性係数はいずれも有意であった。

表 2：大学留学生群の因子分析結果と因子間相関係数

	因子				
	1	2	3	4	5
まとまった	.826	.174	-.255	.011	.024
なめらかな	.771	-.131	-.102	.082	-.027
スムーズな	.611	.092	.184	.041	-.041
つながりのある	.570	.264	-.156	.128	.030
直線的な	.562	-.111	-.030	.014	-.033
わかりやすい	.541	-.124	-.002	.151	.189
進展した	.508	.271	.238	.052	-.169
深まりのある	.443	.009	.135	.418	-.163
一貫した	.437	.177	-.160	.101	.196
妥協した	-.040	.738	.048	-.301	.011
ゆったりとした	-.152	.733	-.526	.077	.130
中立な	.009	.728	-.149	-.052	-.122
協調的な	.088	.701	.021	-.128	.188
共感した	.208	.511	.126	-.236	.073
対等な	-.175	.476	.011	.141	.246
なごやかな	.267	.386	.286	-.057	-.051
にぎやかな	.036	-.228	.825	-.270	-.002
オープンな	.147	-.017	.605	-.249	.343
動きのある	-.044	-.048	.588	.134	.222
積極的な	.117	-.050	.559	.131	.016
多様な	-.331	.169	.506	.070	-.091
多面的な	-.273	.367	.442	.407	-.186
参加している	.234	.174	.407	-.078	.103
豊富な	.168	.054	.393	.270	.114
真剣な	.096	-.168	-.227	.700	.132
練り上げられた	.268	-.335	.021	.500	.006
明確な	.367	-.188	-.005	.383	.306
細かい	.174	.218	-.016	.361	.100
適切な	.092	.142	-.056	.030	.596
正確な	.153	.030	.020	.113	.581
心からの	-.247	.103	.359	.208	.486
因子寄与	4.052	3.506	3.295	1.923	1.553
寄与率	13.1%	11.3%	10.6%	6.2%	5.0%
因子	1	2	3	4	5
1	1.000	.629	.536	.516	.623
2	.629	1.000	.502	.477	.568
3	.536	.502	1.000	.549	.362
4	.516	.477	.549	1.000	.431
5	.623	.568	.362	.431	1.000

(2) 大学留学生の話し合いに対する、日本人大学生による評価の観点

大学留学生と日本人大学生との間で、留学生の話し合いに対して評価の観点に相違があるのかどうかを明らかにするため、上記(1)と同じビデオと同じ評定語で、日本人大学生 55 人に印象評定を行ってもらった。

その結果、6 因子が抽出された。日本人学生群の各因子名は、因子負荷量が 0.4 を超える項目の内容から、「1. 場の雰囲気」「2. 議論の深まり」「3. 参加者の関係性」「4. 発言の的確さ」「5. 議論のまとまり」「6. 参加態度」と解釈された(表 3)。各項目間の信頼性係数を求めたところ、いずれも有意に高い値であった。

表 3: 日本人大学生群の因子分析結果と因子間相関関係

	因子					
	1	2	3	4	5	6
にぎやかな	.999	-.219	-.027	-.103	-.078	.115
なごやかな	.723	-.171	.396	-.172	-.101	.187
オープンな	.686	-.173	.151	-.098	-.201	.156
動きのある	.684	.058	-.052	.183	-.082	-.089
急いだ	.580	.030	-.507	-.074	.018	-.150
スムーズな	.415	.354	-.064	.007	.199	.107
なめらかな	.409	.289	-.082	.059	.283	.017
心からの	.395	.143	-.041	.324	-.142	-.094
練り上げられ	.038	.896	-.028	.024	-.048	-.178
深まりのある	.160	.830	.030	-.149	-.334	.092
細かい	-.177	.734	.050	-.038	-.274	.256
真剣な	-.383	.656	-.154	.091	-.011	.016
進展した	.070	.462	.183	.029	.189	.139
豊富な	.068	.456	.056	.219	-.019	.096
協調的な	.121	-.171	.779	.195	.137	-.072
共感した	.201	-.092	.721	-.062	.143	-.069
対等な	-.019	-.038	.624	.211	-.063	.033
妥協した	.026	.076	.577	-.227	-.077	-.410
中立な	-.123	.318	.547	.016	-.147	-.235
適切な	-.117	-.044	.277	.736	-.117	.057
正確な	-.010	.001	.187	.665	.042	.008
明確な	.112	.129	-.088	.540	.166	.039
わかりやすい	.136	.141	-.038	.468	.116	.050
一貫した	-.009	.053	-.089	.411	.017	.256
均質な	-.108	-.154	.166	-.041	.706	-.194
一面的な	-.118	-.280	-.214	-.222	.517	.061
直線的な	-.140	-.095	-.155	.165	.507	.032
まとまった	.000	.294	.318	.050	.476	.008
つながりがある	.052	.431	.083	-.002	.434	.055
積極的な	.343	.093	-.217	.094	-.173	.615
参加している	.167	.156	-.010	.143	-.052	.401
因子寄与	3.813	3.826	3.046	2.190	2.026	1.149
寄与率	12.3%	12.3%	9.8%	7.1%	6.5%	3.7%
因子	1	2	3	4	5	6
1	1.000	.594	.217	.376	.366	.351
2	.594	1.000	.386	.683	.390	.376
3	.217	.386	1.000	.364	.114	.360
4	.376	.683	.364	1.000	.305	.376
5	.366	.390	.114	.305	1.000	.318
6	.351	.376	.360	.376	.318	1.000

(3) 留学生の話し合いに対する、留学生と日本人大学生の評価の観点の比較

上記(1)と(2)の比較から、日本人学生と留学生とでほぼ同じ因子だとみなすことができたのは、日本人学生の第 2 因子及び留学生の第 3 因子である「参加者の関係性」のみであった。また、それぞれの群で評定者の評価が最も一致している第 1 因子は、日本人学生が「場の雰囲気」であるのに対し、留学生は「議論の流れ」であることから、同じ話し合い場面に対する両者の評価の観点が異なる

ことが明らかとなった。

日本人学生と留学生とで抽出された因子が異なるが、その一方で、それぞれの群の因子を構成する項目の類似性から、因子を対応させた上で、評者間の各場面の平均因子得点がプラス傾向かマイナス傾向かを比較した場合、全体的な傾向は両群ともほぼ一致していた(表 4)。したがって、評価の観点は異なるものの、場面全体の評価の傾向は類似しているといえる。

表 4: 各場面の平均因子得点 (日本人学生群・留学生群)

	因子名	場面1	場面2	場面3	場面4	場面5	場面6
日本人学生	場の雰囲気	-0.77	1.26	-0.16	0.07	0.16	-0.49
	議論の深まり	-0.74	0.56	-0.32	-0.22	0.59	0.13
	参加者の関係性	0.35	0.68	-0.24	-1.24	0.17	0.35
	発言の的確さ	-0.20	0.38	-0.39	-0.35	0.42	0.14
	議論のまとまり	-0.39	0.35	-0.33	0.13	0.24	0.00
留学生	参加態度	-0.30	0.82	-0.27	-0.34	0.17	-0.03
	議論の活発さ	-0.56	1.29	-0.27	-0.33	0.21	-0.34
	議論の緻密さ	-0.44	0.56	-0.77	-0.09	0.53	0.22
	参加者の関係性	0.17	0.86	-0.66	-1.07	0.31	0.40
	適切な言動	0.01	0.65	-0.69	-0.60	0.31	0.31
議論の流れ	-0.24	1.07	-0.87	-0.54	0.33	0.25	

(4) 話し合いの評価に影響を与える参加者のふるまい

日本人学生群と留学生群の評価に影響を与えるのかを探るために、上記(1)と(2)の印象評定で用いた 6 つのビデオのうち、因子得点の傾向が特に異なるビデオ 3 ビデオ 4 に焦点を当て、各因子の正負に影響を与えたであろう、参加者のふるまいの特徴を抽出した。その結果、評価の観点は違っても、おおむね同じようなふるまいに対してマイナスの評価をしていた。他方、新しい視点を持ち込む発言が、日本人学生からは「議論のまとまり」の観点で負方向に評価されるのに対し、留学生からは「議論の活発さ」の観点から議論を多面的にするものとして正に評価されるなど、同じふるまいであっても、両者間で評価が分かれるものも見られた。

以上の結果から、日本人学生と留学生が共に話し合いに参加した場合、話し合いに対する評価の観点が異なるため、互いの話し合いの進め方に違和感を感じたり誤解が生じたりする可能性が示唆される。したがって、話し合いに対する評価の観点や進行の仕方に違いがあることを互いに認識した上で、協働で問題解決をしていくことができるよう、話し合いをメタな視点で捉える能力を育成することが必要であることが明らかになった。

(5) 大学留学生の話し合い能力育成カリキュラム

研究代表者らは日本人大学生を対象として開発された「自律型対話プログラム」(森本・大塚 2012) を援用し、留学生対象の体系的な話し合いトレーニングプログラムの開

発を行った。「自律型対話」とは、「ファシリテータなど第三者の支援者なしに当事者が直接、主体的に話し合い、問題を解決する対話」(森本・大塚 2012)である。「自律型対話プログラム」は、自律型対話を実践できる対話能力を目的として開発されたものである(大塚・森本 2011、森本・大塚 2012)。

自律型対話プログラムは、ワークショップ型学習の形式を採用し、参加者の体験と実践を重視している。また、図 1 に示すように、話し合いのテーマ(内容)に関する学習と、話し合いの進め方に関する学習の二つの軸から成り立っている(大塚・森本 2011)。

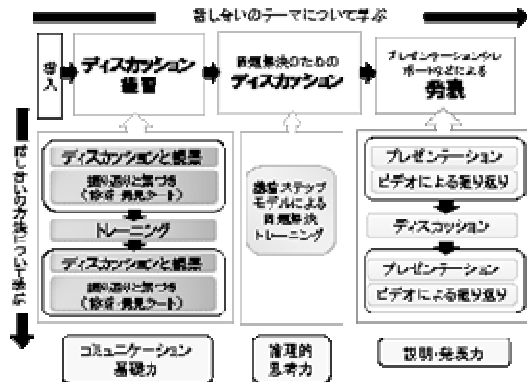


図 1: 自律型対話プログラム

「自律型対話プログラム」を留学生対象に採用した留学生のための話し合いトレーニングプログラムの開発に当たり、2009 年から複数の大学において継続的に実施し、プログラムの改善を行っている。改善の結果、「自律型対話プログラム」を留学生対象に採用するに当たり、以下の 3 点をプログラムに追加した。

- ① 話し合いの評価指標 7 項目 + 日本語に関する指標「日本語：文法・発音・語彙」
- ② 話し合い時に使われる日本語表現に関するコミュニケーションスキル・トレーニング
- ③ 毎回の授業における自己・他者のふるまいと気づきを記録するポートフォリオ

①について、日本人大学生対象の「自律型対話プログラム」では、評価指標 7 項目(「1. 誠実な参加態度」、「2. 対等な関係性」、「3. 議論の活発さ」、「4. 意見の多様さ」、「5. 議論の深まり」、「6. 議論の管理」、「7. 意見の積み上げ」)を使って学生が相互に話し合いを評価する。留学生対象にプログラムを採用するにあたって、日本語に関する指標「日本語：文法・発音・語彙」を追加した。これは、授業の日本語学習としての位置づけを考慮したためである。ただ、話し合いに関するメタな視点や論理展開に意識を向けさせるため、必要以上に言語行動に執着しないように、項目の設定は最小限にとどめた。

②についても授業の日本語学習としての位置づけを考慮して追加した。これは、話し合い時に使われる日本語表現、特に、議論の始め方、ターンの取り方、他者への投げかけ、意見の述べ方などのメタ言語表現について、ブレインストーミングをしながら意識化を図るトレーニングである。

③については、授業の説明や話し合いの評価を記入するシートに、毎回、授業後にふりかえりと「話し合い」に対する考えを記入する欄を加えたものを冊子化し、留学生自身が、記入したコメントや話し合いに対する考えの変遷を、いつでも遡ってふりかえることができるポートフォリオとしての機能を持つ教材を作成した。

#### (6) プログラムに参加した留学生の意識

本研究が開発したカリキュラムの効果を測るために、実際に本カリキュラムに基づくプログラムを経験した留学生の話し合いに対する意識、特に話し合いに関するメタな視点を明らかにするために、留学生による授業評価アンケートと、毎回の授業後に話し合いに対する考えを述べた記述(ポートフォリオ)を分析した。

まず、授業評価アンケートの結果を表 5 に示す。回答者数は 2011 年度春学期と秋学期合わせて 16 名である。回答は「非常にそう思う=5」から「まったくそう思わない=1」の 5 段階評価である。

表 5: 授業評価アンケート結果

質問	平均
(1) ディスカッションするのは楽しかった	4.94
(2) ディスカッションするのは役に立った	4.94
(3) ディスカッションを観察するのは楽しかった	4.31
(4) ディスカッションを観察するのは役に立った	4.69
(5) ディスカッションのふりかえりは楽しかった	3.94
(6) ディスカッションのふりかえりは役に立った	4.68
(7) 議論ステップモデルは楽しかった	4.31
(8) 議論ステップモデルは役に立った	4.69

表 5 の結果から、プログラムに対する評価は概ね高いことがわかる。しかし、ふりかえりに関して「役に立った」の平均評点が 4.63 なのに対し、「楽しかった」が 3.94 であることから、ふりかえり活動は、留学生にとってその有効性は認識しつつも、多少なりとも負担感を伴うものであった可能性がある。

また、毎回の授業後に留学生が話し合いに対する考えを記述したポートフォリオを分析したところ、コミュニケーション・スキルに関する本プログラムの話し合いの実践・観察は、留学生が自己の話し合いに還元しうる新たな視点を獲得するための効果的なプロセスを提供できるものであることと、コミュニケーション・スキル・トレーニングが留学

生の話し合い能力の向上の実感に寄与するものであることがわかった。一方、話し合いの評価指標を用いたふりかえり活動については、負担感を抱える学生がいるなど、評価が分かれたことから、評価指標や活動の進め方についてさらに工夫が必要であることが明らかとなった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 森本郁代、会話の中の間と沈黙、『日本語学』2013年4月増刊号、査読無、2013、49-62
  - ② 柳田直美、森本郁代、大学留学生対象の話し合いトレーニングプログラムの開発、『WEB版 日本語教育 実践研究フォーラム報告』、日本語教育学会、査読無、2012、1-10
- [学会発表] (計8件)
- ① 森本郁代、話し合いを通じた定住外国人支援の可能性、日本語教育学会、2012年10月14日、北海学園大学
  - ② 柳田直美、初級学習者対象のコミュニケーション活動 学習者の自己評価変化—Can-do Statementsを用いた自己評価—、日本語教育国際研究大会、2012年8月19日、名古屋大学
  - ③ 柳田直美、森本郁代、大学留学生対象の話し合いトレーニングプログラムの開発、日本語教育学会 実践研究フォーラム、2012年7月29日、早稲田大学
  - ④ 森本郁代、話し合いを評価する—評価指標の策定と評価の方法—、国立国語研究所評価研究プロジェクト共同研究会(招待講演)、2012年6月2日、国立国語研究所
  - ⑤ 水上悦雄、森本郁代、大塚裕子、鈴木佳奈、柏岡秀紀、賛否表現評価ラベルによる合議目的の話し合いの構造化の試み、言語処理学会、2012年3月16日、広島市立大学
  - ⑥ 森本郁代、水上悦雄、柳田直美、日本語学習者のグループディスカッションに対する評価とその評価に影響を及ぼす会話行動：日本人大学生と留学生の印象評定の比較から、社会言語科学会、2012年3月11日、桜美林大学
  - ⑦ 森本郁代、大塚裕子、水上悦雄、鈴木佳奈、柏岡秀紀、対話能力の向上を目指したピアによる話し合いの評価活動—自律型対話プログラムの設計と実践—、日本認知科学会、2010年9月17日、神戸大学
  - ⑧ 森本郁代、Doing “introducing a new

topic” : features of topic shift in Japanese group discussions、International Conference on Conversation Analysis (ICCA2010)、2010年7月7日、マンハイム大学(ドイツ)

[図書] (計2件)

- ① 森本郁代、大塚裕子、水上悦雄、他、ナカニシヤ出版、自律型対話プログラムの開発と実践、2012、384
- ② 大塚裕子、森本郁代、水上悦雄、他、ナカニシヤ出版、話し合いトレーニング—伝える力・聴く力・問う力を育てる自律型対話入門—、2011、130、50、85、107～114

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

森本 郁代 (MORIMOTO IKUYO)  
関西学院大学・法学部・教授  
研究者番号：40434881

##### (2) 研究分担者

柳田 直美 (YANAGIDA NAOMI)  
関西学院大学・日本語教育センター・常勤講師  
研究者番号：60635291  
(H24→H24：研究分担者)

##### (3) 連携研究者

水上 悦雄 (MIZUKAMI ETSUO)  
独立行政法人情報通信研究機構・音声コミュニケーショングループ・研究員  
研究者番号：30327316